

“共同注意”の発達的变化 その1 ——二項から三項への移行過程に関するエピソードに着目して——

吉田直子¹⁾

Joint Attention and Its Development: Part 1 An episodic analysis about the Transition from Dyadic to Triadic Interactions

YOSHIDA Naoko

要 約

一乳児を対象とした生後6カ月から10カ月までの日常的な母子相互作用の観察を通して、二項的關係から三項的な關係がどのような要因のもとに生まれるかを、主にエピソード記述の手法を用いて検討した。とくに遊びの中で母子の共同注意の発達の変化と母親と乳児の行動連鎖について分析した。量的分析の結果、乳児の注視や身体活動量からみると月齢とともに乳児から母親に働きかける傾向が増し、母親は逆に乳児に注意を喚起することが少なくなる傾向にあった。エピソード記述におけるメタ観察の分析からは、6カ月齢では母親からの注意喚起による三項的相互作用への移行が見られるが、7カ月齢以降は、乳児自身の遊びに母親が応答する形が多くなった。また、9カ月齢以降は、乳児は多様な社会的スキルを示すようになり、共同注意が成立したことをうかがわせた。

共同注意の発達には、月齢によって変化する乳児の行動特徴に呼応する母親の働きかけが重要な役割を果たすことが示唆された。

キーワード：三項的關係 共同注意 エピソード記述

問題

私たち動物は環境と関わりながら生きているが、ヒトはとくに他者の行為との協調を生み出す知覚と行為の統合的活動、すなわち「相互行為システム群」の中で成長するといわれる(Reed, 1996)。すなわち、乳児期の、「吸乳—授乳」、「むずがり—抱き」、「見つめあい」、「微笑みあい」から始まる様々な感覚運動的な他者との関係性を経験し、模倣やコミュニケーションといった象徴機能の基礎が形成される(遠藤, 2005)。とくに生後6カ月から1歳前後にかけて成立する母子間の注意の共有という現象は、他者との協調を生み出す知覚と行為の統合的活動の一例であり、乳児の象徴機能、言語、社会的認知、

自己意識の発達に重要な役割を果たすものとして、近年注目されている。

乳児の他者との注意の共有について最初に実験的に検討したのはスケーフとブルーナーであった(Bruner, 1983/1988)。その後とくに視覚的な注意の共有についての数多くの実験的研究から、乳児は生後9カ月齢から12カ月齢ごろに他者の見ているモノに注目するなど他者と視線を共有することが明らかになってきた(Butterworth, 1995, Tomasello, 1995, 矢藤, 2007)。

しかし、視覚的な注意の共有の成立時期およびその過程については、注意の共有現象とは何かという定義の問題と深く関わっており、多くの見解がある。例えば、ことばやコミュニケーション、他者認知の基礎としての共同注意研究の大家である Tomasello (1995) は、乳児が「他者とは意図を持った行為者

1) 中部大学現代教育学部児童教育学科

である」ことを知覚するのは9カ月頃であるが、共同注意の成立そのものはそれより遅く15カ月頃であるという。彼によれば、共同注意とは「乳児が対象物と母親との間で視線を交互に切り替えて注意を配分するエピソードが少なくとも数秒間持続し、乳児が他者の意図性をはっきり認識していること」であり、その成立には相手の注意に追従したり自分から注意を誘導することが含まれている。

Butterworth (1995) の定義では共同注意とは「だれか他の人が見ているところを見ること」であり、視線追跡の有無だけを問題にして母親の視線を追跡する乳児の視線の動きを3段階に設定した。生後6カ月ごろ出現する生態学的メカニズム、12カ月ごろの幾何学的メカニズム、および18カ月で出現する表象的メカニズムである。ただし、視線のみを指標にしているので、子どもが、自分が母親と同じものを見ていることに気づいているかどうかが不確定であるという問題点が指摘されている。

一方最近では、注意の共有をより広義にとらえその発達過程を検証する研究が注目されている。例えば大藪 (2004a、2004b) は、注意の共有を共同注意と呼び、「他者とともに事物に注意を配分し共有すること」と定義し、注視よりも広い注意という概念で説明しようとした。そして共同注意現象は生後9カ月以前から見ることができ、新生児期から2カ月頃は前共同注意というべき時期であるという。この時期には母親の顔への持続的注視という人指向性が見られ、母親の振る舞いによっては乳児の注意は持続するからである。また生後2カ月から半年までの間でも、乳児の情動表現は母親の応答とのあいだに随伴性や相補性があり、母親があやせば乳児の泣きは抑制される。また離乳食やスプーン、おもちゃなどの対象物を介して注意が持続するなどの三項的な関係が始まる。生後半年から1年頃、乳児は母親以外の対象物に自発的に注意を向け始めるが、この行為は母親の能動的な働きかけに支えられている場合が多い。そこで大藪 (2004a) はこの時期の注意を支持的共同注意と呼んでいる。そして、他者と意図および視線を共有し他者と対象物を共同使用するような意図的共同注意が成立するのは1歳頃であるという。

このような広義の解釈によって共同注意はより小

さい月齢から検討されるようになってきた。則松 (2004) は、共同注意を「乳児と母親の注意がぶつかり合い、かさなりあったと解釈される現象」とし、これをどのように乳児が経験しているか、また何をきっかけに注意の共有現象が成立するかに注目した。則松 (2004) の事例研究によれば、生後6カ月前後の乳児は、母親からの働きかけによって相手に共感する感情や相手の注意を誘導する力が芽生えてくることが示唆されている。一方、Landry et al. (1989) は、生後6カ月の乳児を対象に実験的手法を用いて母親が子どもの注意を対象物に向けさせる行為を検討し、母親が子どもの注意を喚起するタイミングや注意の定位を促す方略を明らかにした。塚田 (2001) は、乳児がモノと遊んでいる二項的相互交渉の場面に、母親が介入的に対象物を提示した場合の乳児の応答性について、7か月から12か月までの複数の乳児を縦断的に観察した。その結果、生後9か月ごろから、乳児は母親のモノ提示に注目し、三項的な相互交渉が見られ、その後は、交互注視と対象物の提示などが連鎖性をもつようになることを示唆した。また矢藤 (2000) は、20～22カ月児を対象に母親の注意喚起行動を分析し、母親の「注意共有方略」は、母親主導の「転換」よりも乳児に合わせる「応答」のほうがモノへの興味を持続させることを見出した。

このように、発達初期の注意共有の場面では、母親の注意喚起方略や発話内容が乳児の行為に大きな影響を持ち、乳児の注意を他者やモノに向ける要因であることがわかってきた。これまでの研究から発達過程を整理すると、注意の共有現象を広義にとらえた場合、乳児には生後6カ月から1歳あたりまでに共同注意が成立する。そしてその要因としては母親の多様な働きかけが一定のタイミングで、乳児の行為との連鎖の中で行われること必要であると思われる。一般に9か月ごろの乳児は、情報提示的な指さしやいいないないばあ、社会的参照など、身振りによる他者とのコミュニケーションが盛んになる時期である。このころを Tomasello (1999/2006) は The 9-months miracle と名付け、乳児の社会的認知の変革期ととらえている。そしてこの時期の社会的認知の発達には、乳児自身の注視やモノとの相互交渉ばかりでなく、他者の意図性への気づきや相互

交渉における情動反応、身振りなどの発達も密接に関わりを持っているという。

そこで、本研究では共同注意現象において一つのターニングポイントであるといわれる9カ月の乳児の共同注意現象に注目する。そしてこれまで実験的研究において示唆されてきた母親の注意喚起方略、すなわち、注視、応答性、モノ提示、発話およびそれらのタイミングと共同注意現象との関係を、9カ月前後の乳児の事例観察における日常的な相互作用において確認する。とくに、1歳以降で示された母親の注意喚起方略「転換」「応答」(矢藤、2000)が9カ月前後でも見られるのかを、一定の場面を抽出して「エピソード記述」(鯨岡、2005)によって質的に検討する。共同注意現象は、乳児の生活世界に密着した日常的場面で出現するものであり、これを直接的にまたより分析対象とすることは意義があると考えられるからである(則松、2004、塚田、2001、吉田、2005、2007)。

ここで研究方法について述べておきたい。本稿は一事例を対象としているためその示唆するところにはおのずと限界があると思われる。しかし事例研究は、質的研究に位置づけられており心理学研究の黎明期から一定の成果を上げ、社会科学や行動科学の分野でもその有用性は知られている(Willig, 2001/2003)。また、現象やテーマによっては、自然な文脈の中で生起する行動の過程の確実な分析によってしか解明されない場合もある(Runyan, 1982, Dromi, 1987)。さらに事例研究の結果は常に一般化可能性が問題となるが、事例研究での一般性とは、「読み手の了解可能性、公共性というべきもの」(鯨岡、2005)であるという考え方を参考に、本稿でも、読み手にとって了解可能な情報の提示を試み、より一般性の高い事例研究を目指したいと考える。

目的

一乳児を対象とした生後6カ月から10カ月までの日常的な母子相互作用の観察を通して、二項的關係から三項的關係がどのような要因のもとに生まれるかを検討する。とくに遊びの中で母子の視線や注意の共有にかかわるエピソードに注目し、三項的相互交渉の発達的变化と母親と乳児の行動連鎖につ

いて分析する。このことを通して、母親の注意喚起行動の特徴と乳児の共同注意の初期発達の関係について考察を深めたい。

方法

観察対象 2007年10月生まれの男児(A児)とその母親(20代後半)。A児は周産期から乳児期まで正常範囲の発達。生後6カ月から研究協力を依頼し、4週間に一回程度、計5回の観察を実施した。今後も2歳前後まで観察を続ける予定で、了解を得ている。

手続き 筆者が協力者の自宅を訪問して、日常使用しているおもちゃを用いて母子が遊んでいるところをビデオカメラで記録した。記録に際しては、母親にはできるだけ対面していつものように遊ぶようお願いし、毎回ほぼ15～20分程度撮影した。また、撮影中はできるだけ状況をフィールドノートに記録した。実際に訪問した時のA児の月齢は、第1回目6カ月28日齢、第2回目7カ月15日齢、第3回目8カ月16日齢、第4回目9カ月13日齢、第5回目10カ月11日齢、であった。1回目は6カ月齢の後半ではあるが、6カ月以内ということなので仮に6カ月を代表させたデータとして扱っていく。実施は2008年4月から8月末までであった。

資料の整理と分析方法 各回の20分以上の記録の内、状況やカメラに慣れたと思われる(A児が遊びに集中し始めた時から10分間を分析の対象とした。10分間というのは、生後1年以下の母子相互交渉に関する他の研究でも10分程度とされている(塚田、2001、矢藤、2000)ことに倣った。実際には、第4回目の記録で、A児が画面から外れて9分間しか分析対象にできなかったため、各回とも9分間の記録を分析対象とした。これらの記録に対して、量的分析すなわちコーディング項目の生起数の変化の検討と各回の相互交渉に関するエピソード記述による質的分析をおこなった。

コーディング項目は、則松(2004)およびTomasello(1995)を参照して表1のように定義した。この定義をもとに、各項目ごと、1分ごとのその生起回数をコーディングシートに記録し集計した。コーディングの信頼性を確認するために、第一回目のデータ

表1 コーディング項目と定義

	《A児の行動》	《母親の行動》
	1. 自分が操作しているモノへ	9. 自分が操作しているモノへ
a. 視線の方向	2. 母親の目へ	10. 子の顔へ
	3. その他へ	11. その他へ
	4. 注意喚起的	12. 状況描写的発話
b. 発声	5. その他	13. 注意喚起的発話
		14. その他
	6. 自発的なモノ操作	15. 注意喚起的モノ操作
c. 身体活動	7. 母の模倣	16. 子の模倣
	8. その他	17. 子への接触
		18. その他
《定義》		
a.	視線の方向とは、対象に2秒以上視線を向けてその視線がほかに移動するまでを1回として注視回数をカウントしたもの	
	3. その他とは、A児の視線が、1、2以外のすべての環境物に対して向けられている場合で、母親の手や体を含めて母親の方に視線が向いている場合も含む	
b.	発声とは、ひとまとまりの発声や話し始めから2秒以上の休止までの一連の発話を一回とカウントしたもの	
	4. 注意喚起的とは、A児の発声が、母親に向けられ注意を喚起していると判断できる場合	
	12. 状況描写的発話とは、モノの命名やA児の行為の解釈（○○してるのね）などの発話	
	13. 注意喚起的発話とは、通常より声が高い、抑揚が強い、拍手を伴うなどの注意を惹きつける発話	
	14. その他とは、上記以外の発話で、ほめたり励ましたりする発話も含む	
c.	身体活動とは、体の移動や姿勢の変化および、2秒以上続くひとまとまりの活動を一回とした	
	15. 注意喚起的モノ操作とは、モノを振ったりたたいたり音を出すなどの行為	
	17. 子への接触とは、A児の身体に手をおく、抱くなどの接触した状態	

を独立に2回カウントしその一致率を算出したところ91%であったのでこの方法でコーディングを進めた。

また、エピソード記述は次のような手続きですめた。まず、各回のA児の二項的關係から三項的關係への移行に関するエピソード、すなわち「乳児がモノを自分だけで操作している状況(二項)から、母親もしくは乳児の行為をきっかけに母子が注意を共有するような相互作用(三項)へと変化していく一連の出来事」を抽出し、エピソード記述の手法でその意味を分析していく。エピソード記述とは「複数のエピソードを重ね合わせて比較考量し、その差異と同質性から、メタ意味を掘り起こすこと」(鯨岡、2005)とされており、エピソード記述に際しては、「できごとの客観的な流れを描出し、読み手がおよその共通理解に達することができるように表現」し、「問主観的に把握した部分や自分の思い、場の雰囲気」を記述に盛り込みつつその意味をとらえる」(鯨岡、2005)必要がある。そこで筆者もこれに倣って、

本稿では観察した各回から3つのエピソード、合計15のエピソードを抽出し、それぞれに対して(エピソードの流れ)と(メタ観察)に分けて記述してメタ観察の内容を比較検討する。

結果と考察

(1) 相互作用における視線の方向—量的分析

母子の対面的な相互交渉において二人の視線はどこに向いているのかを知るため、3つの対象(自分が操作しているモノ・相手・その他)への注視回数をカウントした。その結果、図1、図2のような傾向が得られた。これを見ると、A児は全体としては、自分が操作しているモノかその他のところを見ており、相対的には母親の顔または目をあまり見ない。ただし、生後7カ月から10カ月半までの変化を見ると、徐々に母親の顔を見る回数は増加しているようである。

また、8カ月半の時期に、A児の操作しているモ

ノへの注視回数が減り、その他への注視が多いのは、この回ではビデオを撮りはじめ数分後にやや不機嫌となったため、母親がA児をあやすような働きかけをしたからである。すなわち、高い調子の声を出しながらおもちゃを振ったりして見せたりしておもちゃに注目させようとし、その結果A児が母親の持っているモノに注視することが多かったためである。このエピソードについては後述する。

一方母親の視線の方向は、自分の持っているモノではなく子どもに向けられることが最も多かった。また、その他へはほとんど視線は向かわず、子どもかモノかに集中している。さらにA児の結果と同じく、母親も8カ月半の時期に子への注視が減っている。これは、母親が、A児が不機嫌になった時に、A児の顔ではなく自分の操作しているモノに注目しながらA児に働きかけていることを示している。

このように、母子の相互作用における視線の方向、すなわち遊んでいるときに何を見ているかを比較してみると、子どもはおもちゃや周りを見ており、母親は第一に子どもを見ている。すなわち、視線の方向だけから見たとき、9カ月前後の母子相互交渉とは、子どもがおもちゃで夢中になって遊び、母親がそれを見守る、という交渉であることが示唆される。

(2) 相互作用における発声について一量的分析

A児の発声を注意喚起的な声とその他に分けてカウントしたところ、図3のようになった。おおよその傾向としては月齢とともに発声は増えてくる。8カ月半の時期に注意喚起的発声が多いのは、先に述べた不機嫌な声による母親への呼びかけのような発声が多かったためである。

母親の発声内容は、図4に見るように8カ月半の時期まではそれ以前の時期とよく似た傾向である。すなわち、注意喚起的な発声とその他に分類される発声が多く、状況描写的な発声が少ない。9カ月半の時期は、3種類の発声の頻度はほぼ同じである。これは、このときの遊びの内容に関係している。この回の遊びは、母親主導で「魔法瓶からお茶を注いで飲ませる」、「箸に見立てたブロックでも小さなブロックをつかんで食べさせる」というもので、そのため母親の発声は「コンコンコン」と注ぐ音をまねたり、「あーん」「むしゃむしゃ」「あーおいしい」な

どの状況描写的な発声が多かった。また、10カ月半の時期は、A児が母親にやや背中を向けるような位置に座りなおし、ブロック遊びに熱中する場面が続いた。そこで、母親の発声は相対的に少なくなったといえよう。

図3と図4を比較するとわかるように、全体として、子どもの発声より母親の発声が多く、母親の発声では、注意喚起的なものが多いといえる。

(3) 相互作用における身体的な活動について一量的分析

A児の身体的な活動について、図5に見るように3分類して生起数をカウントしたところ、どの時期も自発的なモノ操作が最も多く、母親の行為についての模倣はほとんど見られなかった。その他に含まれる身体の移動などの大きな動きは多少みられた。特に、8カ月半の時期の不機嫌な状態では母親の方へ移動したり体をゆすったりする行為が多かった。

母親の身体活動は、図6に示すように注意喚起的なモノ操作やその他が多く、子どもへの接触や模倣は少なかった。二人とも、モノ操作をしながら対面している状況にあるといえることができる。

(4) 三項関係への移行の母子相互作用のエピソード記述

観察されたビデオ記録から、「A児の注意がモノだけ向かっている状況から、そこに母親が介入し何らかの三項的相互作用が生まれるような一連の出来事」(およそ1、2分)を、各回とも3エピソード抽出した。各エピソードともまず客観的に出来事を描写し(エピソードの流れ)、その意味を共同注意の発達過程に照らして考察した(メタ観察)。

エピソード1：一回目の記録(6カ月後半)

(エピソードの流れ) 母子対面して座り、二人の間におもちゃX(20センチ四方の立方体)がおいてあり、A児は右手でおもちゃY(4センチ大のふた付き鏡)を取り上げて左手に持ち替え、それをおもちゃXにこすりつけるようなしぐさをしている。A児はずっと持っているおもちゃのほうを見ており、カチャカチャと音をさせている。母親は、しばらくその様子を見ていたが、「じゃあ、ママ本読もうかな」といいながら近くにあった本を拾い上げてパラパラ

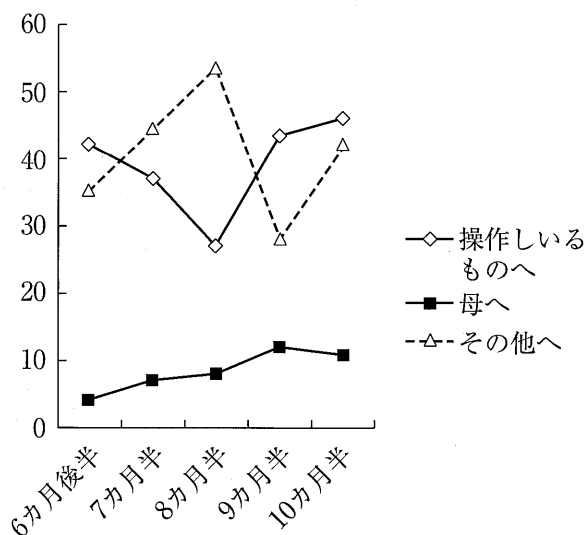


図1 A児の対象別注視回数

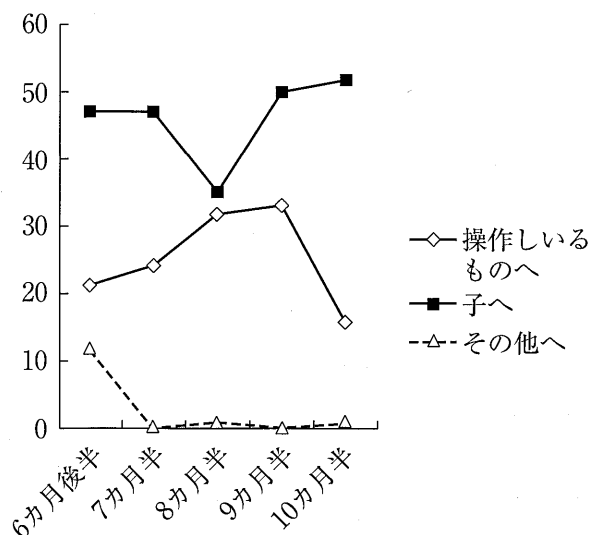


図2 母親の対象別注視回数

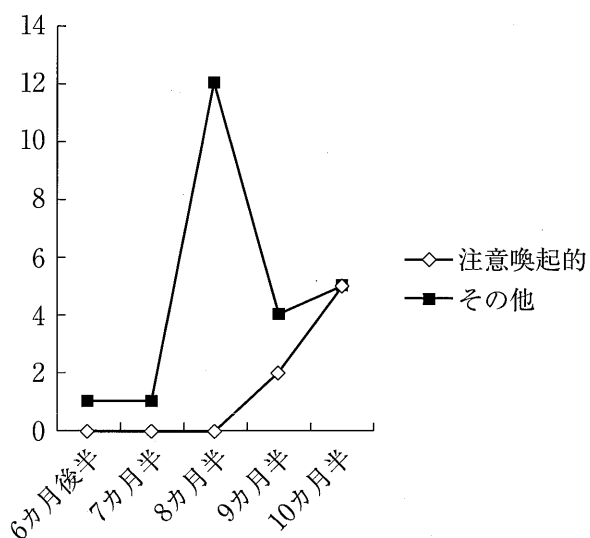


図3 A児の発声回数

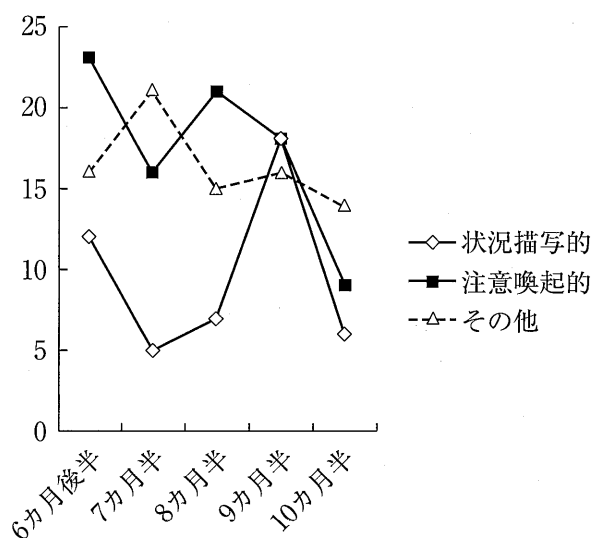


図4 母親の発声回数

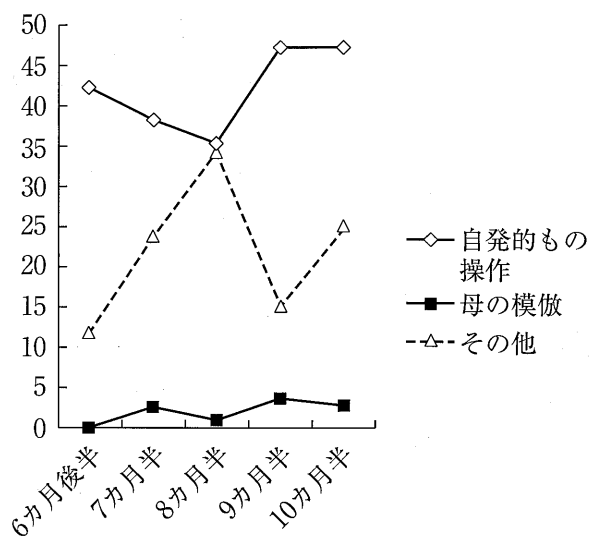


図5 A児の身体活動の生起数

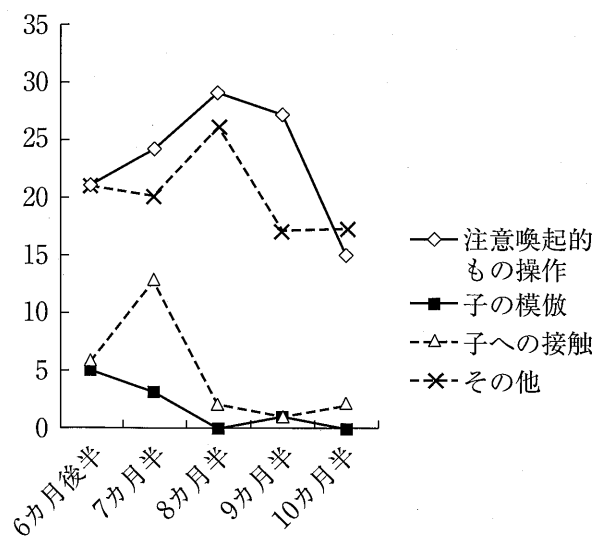


図6 母親の身体活動の生起数

とめくり、少し音読をする。その本は以前から A 児が一人で遊んでいたものという。A 児は、手の動きを止めて母親が声を出したタイミングで母親のほうを数秒間見上げて、またおもちゃ Y をこすりつける遊びをするが、すぐに腰を浮かすようにして母親の本に手を伸ばす。

母親は「A ちゃんも読むの？ じゃあ、これ……」と言いながら、A 児が両手で本を持てるようにして支えながら頁をパラパラとめくってみせる。A 児はそれを自分でもち、パラパラとめくる。母親は本を支えながらそれを見ている。

(メタ観察) A 児ははじめ二項的行為が続いていたが、母親の声をきっかけに母親の持っている本に興味を示して少しの時間だが一緒に操作する、という三項的關係の萌芽的行為が見られた。母親の注意喚起による支持的な共同注意現象といえる。気に入ったモノ(本)という要因もあろう。

エピソード2：一回目の記録(6カ月後半)

(エピソードの流れ) A 児は右手でおもちゃ Y を操作しながら下を向いていたが、母親が別室にいる記録者(筆者)に対して歌を歌っていかと少し大きな声で質問したので、母親の顔を見上げる。その後母親は、A 児の顔を覗き込むようにして、両手を前に出して指を一本ずつ立てながら指遊びの歌を歌いだす。A 児は手を止めて母親の指もしくは顔をずっと見ている。歌の後半になって、A 児が下を向いておもちゃのほうを見たので母親は、A 児の両頬を指で触りながら歌を続け、A 児がまた母親のほうに注目した。その後母親が、歌の終りのところで A 児の顔に自分の顔を近づけると A 児も顔を母親にくっつけるようなしぐさをした。

(メタ観察) 母親の介入により動作と歌という共通のテーマのもとでの相互作用である。ここでは A 児は積極的な反応は見せなかったがおもちゃ操作を中止して母親の指に注目しており、歌の最後に自分から母親の顔に近づけるようなしぐさをするなど、注意を共有していたと考えられる。

エピソード3：一回目の記録(6カ月後半)

(エピソードの流れ) A 児が体温計を床から拾っておもちゃ X にあてたり、打ち付けたりしている。母親は鼻歌(古時計の歌)を歌いながら A 児のおもちゃ操作を見ている。そしておもちゃ X の上部の

ふたを開けて中からおもちゃ Z (約3センチ四方の立方体、おもちゃ X の付属品)を3、4個取り出すと、はじめ A 児は持っていた体温計を放してふたに手を出し、2、3度ふたを開閉したりする。母親がふたを半開きでおさえて、手のひらの上のおもちゃ Z を「はいどうぞ」と差し出すと A 児はそれを右手で1個つかんで、おもちゃ X にあてたり振ったりする。母親が、今度はおもちゃ X の上部のつまみを引っ張り上げるとギギーと音がする。A 児はそのつまみに手を出し、母親がつまみを A 児に渡すと、A 児がそれを少し引っ張って音をさせる。その後、母親は、A 児が引っ張るのをやめたときにおもちゃ Z のうちの一個を A 児に差し出す。すると A 児はあいている手でそれをつかんで、両手のおもちゃをそれぞれ別々におもちゃ X に当てたり、落としてまた拾ったりして遊ぶ。

A 児はしばらくして左手のおもちゃを放して、今度は近くの体温計をつかんで振ったり、斜め後ろのソファの上のほうに手を伸ばしたりする。このとき母親が、「ちょうだいそれ」と手を出すと、A 児は体温計を母親に渡したので、母親は「わー、A ちゃんがくれたー」と声をだす。

(メタ観察) 母親の誘導によって母親の持っているものをモノを操作するという三項的な相互作用が始まっており支持的共同注意現象である。また、母親にモノを渡す場面もあり、やりもらいという相互作用の萌芽がみられる。

エピソード4：二回目の記録(7カ月半)

(エピソードの流れ) 母子対面して座り、二人の間におもちゃ X がおいてある。A 児はおもちゃ Z を一個ずつ両手でもち、カチカチと打ち合わせている。母が、おもちゃを持たずに同じように両手の握りこぶしを合わせる動作をし、拍子をとりながら「カチカチ、カチカチ」と声をだすので、A 児は時々母親を見たり、周りに目をやったりしながらおもちゃ Z を両手で打ち合わせる。少し体をゆすり嬉しそうである。母親は「じょうずじょうず、カチカチ、カチカチね」などといい、しばらく二人で同じ動作を繰り返していた。

(メタ観察) A 児の自発的なおもちゃ操作を母親が模倣し、A 児の行為が強化された。これは、子どもの自発的な遊びに母親が呼応することによって、

テーマが共有された状況といえるだろう。

エピソード5：二回目の記録（7カ月半）

（エピソードの流れ）母親は、カメラのほうに這っていったA児を抱いて元の位置に座らせ、「Aちゃんの好きな本を読もう」と本を取り出してみせる。対面して座る位置にいる「動物のあかちゃん……」と母親が声を出すと、A児は母親を見上げ、本に手を出す。母親がそのまま読むと左手で本を触って、今度は両手を出して自分で本を持ちしばらく見入る。その後本を開閉したり、おもちゃXのうえにポンと音を立てておいたりする。母は「本好きだもんね」といいながらA児の頭をなでる。A児が少し本を両手で持ち上げて顔が隠れたので母親は、「いあないないばあ、してるの？」と声をかけ、顔をのぞきこむ。Aも少しの間母親を見上げている。そしてA児は両手で持ち上げ本で顔が隠れる。母親がまた「いあないない……」という。母親がちょっと間をおいて「ばあ」というとA児は本を下して母を見る結局5回これを繰り返した。母親がタイミングをあわせているのかA児が合わせているのか判別できない。タイミングよくあげさげするので母親が手を打ってほめたり、顔を覗き込んだりする。A児も顔を隠すときは前かがみになり、本で顔を隠そうとするように見えた。

（メタ観察）母親が乳児の意図を了解して乳児の遊びをテーマに三項的な相互作用が始まっている。またその相互作用を持続させるために母親は働きかけを行っており、支持的な共同注意の状況であるといえよう。

エピソード6：二回目の記録（7カ月半）

（エピソードの流れ）不機嫌な声を出して母親に抱っこされようと倒れ掛かる。母親はちょっと抱いてまた対面して座らせる。A児は床にあった黄色い円盤のおもちゃを拾って操作する。母親はしばらくそれを見ていたが、ビニールの縄とびの縄を取り出して、両手でもむように丸めて音を立ててみせる。

A児がちらとこれを見る。また、母親は縄とびの取っ手のところを両手で別々につかんで、「カチカチ……」と10回以上調子をつけてリズムカルに打ち合わせてみせる。するとA児が手を出すので母親は丸めた縄を渡す。A児は片手で取っ手を握り、ひっぱったり他の手に持ちかえたりする。また片手

でひものところをもって上にあげたり下げたりしながら母親をちらっと見る。母親が「こっちかしてね」とひもの余った部分を持ってひっぱったり揺らしたりすると、A児も縄の取っ手とひものをもって同じように引っ張る。母子で引っ張ったり揺らしたり、共同的な動きに見える。その後、取っ手を持った両手を頭の上のほうに持ち上げたり、おろしたりを何度も繰り返す。上げるときは視線も上向きになり、母のほうを見る。

母親が「上手やね、Aちゃん上手やね」と声をかけながら脇の下あたりを両手でさする。

（メタ観察）母親の誘導によって母親の持っていたモノを介した遊び、三項的相互作用が始まる。声をかけたり、体に触るなどの感覚的な強化も含めた支持的共同注意の場面である。

エピソード7：三回目の記録（8カ月半）

（エピソードの流れ）母親が複数のブロックで鶏の形をつくりながら「コケッコー、コケーコッココッコ……」と高い声を出す。斜め横にいるA児は微笑しながら母親と鶏（高さ20センチくらい）を見て、肩も上下させて「あー、あーあー」とかすれたような小さな声で答える。自分もブロックを一片もっていてこれを上げたり下げたりしながら声を出している。母親が、「Aちゃんはこれを使って、ママはこれを使うから」といくつかブロックをA児の前に置いて自分はまた鶏を完成させようとする。そして同時に「コケッコー、コケーコッココ……」という。このとき母親はA児を見守るというより自分のブロック操作に熱心に取り組んでいる感じがした。

A児は母親の鶏の形に組み合わされたブロックを見たり、自分の持ったひとつのブロックを容器に出し入れしながら「あーあー」と大きな声を出す。二人の発声は何か二重奏のようでもある。

（メタ観察）同じものを見ている時間は少なく二人は並行遊びをしているが、A児は、母親の発声やブロック操作に触発されて、自分も声を出し、ブロックを操作しているように感じられる。二項的關係と三項的關係の中間に位置する相互作用と考えられ、共同注意には至っていない。

エピソード8：三回目の記録（8カ月半）

（エピソードの流れ）母親が二つのブロックを組み

合わせて風車のようなものをつくり「ほら、風車、まわしてみー」とA児に差し出すとA児は大きく目を見開いてじっと見て、左手を出してさわり、回し始める。回転が止まると何度も回す。A児が手を休めたときに母親も同じものに手を出し回す。しばらくして母親が「もっと大きいのにしよう」と風車をいったん自分のほうに持って行ってブロックを追加していると、A児は「わー、あー」と体をゆすって不機嫌な声を出し体を乗り出して風車を触ろうとする。そして母親が大きくなった風車を見せると手は出さないでじっと見ている。母が、風車状になったブロックをA児の手に近づけてやると、A児は少しふれて母親が回す風車を見ている。また機嫌が悪くなり不機嫌な声を出して母親のほうに抱きつくように体を近づける。母親はA児を片手で抱きとめながらも、「ほらおおきくなったよ」、とさらに風車を大きくして回してみせると、Aはいったん動きを止めて風車を振り返りちょっと手を出し、しばらく見ている。そしてまた母親に抱きつくので母親は風車をおいてA児を抱いた。

(メタ観察) 母親の誘導によって母親の持っているおもちゃへの操作が誘発され、共同注意現象が見られた。またおもちゃ操作を誘導され不機嫌な情動も緩和された。

エピソード9：三回目の記録（8カ月半）

(エピソードの流れ) 母親が床に並べたブロック、布絵本、ペットボトルのほうへはいはいで近づき、布絵本に手を出してそれを抑えながら座位になる。すると偶然、布絵本に付属していたスイッチが入ってメロディが始まる。母親のほうをみたので母親が「あ、じょうず」といって、「タンタンタン」と唱和しながら、その本に手を出し、ページをめくって「ほらこれ、Aちゃんお風呂、Aちゃんねんね」といろいろ見せて話している。A児は一緒に本を見ているとまたスイッチが入ってメロディがなりだすと、Aは体をゆする。そして両手でパチパチと拍手する。母親が「うーん」と顔を近づけニコニコ見守る。「パチパチするもんね」といい、メロディに合わせて母親も拍手をする。メロディが止んでもA児は他のおもちゃを手にもったまま体をゆすって母親のほうを見る。そこで母親はA児の動きに合わせて手拍子をしながら「うれしい？ Aちゃん？」とい

う。そしてスイッチを入れて拍手をしながら小声で歌う。A児は母親を見上げメロディにあわせるかのように体をゆすり母親を見上げたり音源の布絵本を見たりする。メロディが止まるとしばらくしてまた母親を見上げて体をゆするの、母はスイッチを入れメロディに合わせて歌いながら拍手をする。するとまたしばらくして体をゆすったり手に持ったおもちゃを振ったりする。

(メタ観察) 母親の誘導的な遊びとA児の自発的身体活動によって共同注意現象がはじまった。母親の応答的な行為ばかりでなく、メロディによって情動が喚起されそれが乳児の注意を強化していると思われる。

エピソード10：四回目の記録（9カ月半）

(エピソードの流れ) 魔法瓶やブロックを前に二人でやや斜めにむきあっている。A児は腰を浮かしながら、いろいろなおもちゃをひとつずつ拾い上げて手に持って、それを見たり放したりしている。母親が、魔法瓶の中蓋を手にとってははじめは「もしもし」と電話のまねをしていたが、A児が関心を示さないで、目の前で振ってみせる。振ると音が出るので、A児は右手に魔法瓶をもったまま、母と蓋を見上げる。母が蓋を「アー面白かった、置いておこう、ここに」といいながら、A児のまえに置くと、A児はその蓋の動きに合わせて視線を動かし、床に置かれたふたをすぐ左手で拾い上げて、母親と同じように振って音を出す。振りながら、母を見たり、カメラを見たりする。嬉しそうな表情で、情緒的な交流もはっきり認められた。

(メタ観察) 母親の持っているモノの動きに合わせて注視し、それを振って母親を見る、という場面は視線の共有を伴う共同注意の状況である。母親が子供の注意を引くようにモノを動かしたことや声をかけたことが乳児のモノへの注視をもたらしたと思われる。またこの場面は、母親の行為の模倣も見られた。

エピソード11：四回目の記録（9カ月半）

(エピソードの流れ) 魔法瓶の蓋や魔法瓶、ブロックが床にあり、A児はそれらを散らすようになで、その後魔法瓶の蓋を手にとってなでまわす。母親が口の中で「ココココ」というのでA児は少し母を見上げた。そして蓋をコップのようにして飲む真

似をする。母親が「うーん、上手」「上手やね」とA児の頭をなでる。そして、「はい」といって、母親は魔法瓶と蓋をもってお茶を「とくとくとく」といって注ぐ真似をし、飲む真似をする。A児はそれを見上げている。母が今度は「はいどうぞ」と蓋を渡すと、ふたを両手で抱え込んで飲むように口をつけ、結局蓋を舐める。母は「うんおいしいー」「うーんおいしいねー」とA児の顔を覗き込み、その舐めるしぐさに合わせていう。再びA児のもっている蓋にお茶を注ぐ真似をして「はい」「とくとくとく」とわたすと、A児は蓋をなめ、母を見たり周りをみたりする。

(メタ観察) A児の自発的な操作に母親が呼応するような共同注意現象が見られた。

エピソード12：四回目の記録（9カ月半）

(エピソードの流れ) A児は母親の手の動きを見たり母親を見上げたりするがすぐに母親の持っていた棒状ブロックを2本とも自分で取って、皿（ふた）に押し付けたり、頭の上に持ち上げたりする。そしてそのブロックを床につけたり耳に当てて母親を見る。耳に当てるとき母親は「あ、もしもーし」という。母親はA児のまえにビンのふたやかごを並べて、他のブロックで叩いてみせる。A児は始めはたたく真似はしなかったが、母親が魔法瓶を叩いてそれまでよりは大きな高い音がしたので、そちらに棒状ブロックを持ったまま手を伸ばして魔法瓶に接触させる。母親と同じ叩くという行為ではないが、同じものに手を伸ばして当てるような打ちつけるようなしぐさである。母親が「じょうず」といって、魔法瓶を支えて、A児がブロックを当てるのをつづけさせている。

(メタ観察) A児の行為に意味づけして応答する。またおもちゃ操作を誘導し、支持的な共同注意現象が出現したが、魔法瓶の音という効果が注意を引きつけたようだ。

エピソード13：五回目の記録（10カ月半）

(エピソードの流れ) A児が棒に房のついたおもちゃを「あー」と声を出して持って振り母親のほうを見る。母親も見守っている。A児が、右横のほうにある透明のプラスチック容器(上部があいている)に、房のついたおもちゃを「あー」といいながら差し込むように触れさせる。そのとき容器が動いて

A児のおもちゃが触れなくなったので母親が容器を支えて容器のあいている上部をA児のほうに向けると、A児は「うがー、あー」といいながら房のおもちゃを中にいれて、手を放す。母親が「あー上手」というとちらっと母親のほうを見た。今度は母親のもっている容器を自分で両手で持って、中の棒を取り出し、容器だけを何回も振る。この間はその遊びに熱中した。

(メタ観察) A児ははじめ母親におもちゃを提示した。またモノを操作しながら母親を見ており社会的参照の瞬間であろう。その後もモノ操作に熱中するが発声や母親への注視があり、母親の支持を前提に操作していると思われる。

エピソード14：五回目の記録（10カ月半）

(エピソードの流れ) A児は小さなうちわを拾い上げ、右手で何回も仰ぐようなしぐさをする。母親が房のついた棒を持って揺らしながらA児を見ていると、母親のほうをちょっと見て「うー」といってうちわを差し出す。「はいありがとう」といって母親が受け取ると、A児は母親の持っている房のついた棒をとる。

そしてそれも放して、母親と逆のほうに体を倒して這って行こうとする。そこで母親が房のついた棒をひろって、房のついたほうを見せながら「ぼんぼん、ぼんぼんぼん」と自分の顔の上のほうで弧を描くように振ってみせる。Aは振り向いてすりなおし、小さなうちわを拾いながら母親のほうを見上げる。母親の振るのを見ながら、自分もうちわを振る。母はずっと、ぼんぼん……と節をつけながら振って、そのおもちゃをA児にわたそうとする。そのとき、A児も持っているうちわを「うー」といって差し出すが、母親が受け取ろうとしても手を離さずまた自分でも操作し始めた。それを母が見守っているとしばらくして、自分からうちわを「うー」といって差し出し母が「ありがとう」と受け取ると手を離れた。

(メタ観察) 母の遊びに誘導されて振るという動作を共有しており、三項的相互作用の状況である。また、発声をともなう“モノのやりもらい”という相互作用も見られた。

エピソード15：五回目の記録（10カ月半）

(エピソードの流れ) A児は、ばらばらのブロック

が沢山はいつている容器を横向きに（上部の開放部分が右手になるように）両手でもって、ザックザックと音をたてながら振っている。その際右手に小さな円形ブロックをもったままである。母親はこれを見守っていて、この小さなブロックを取り除こうとしたがしっかり握っているようで、取れなかった。そこでA児は右手にブロックを持ったまま容器も持って5、6回振り続けていたが、偶然中のブロックが2、3個一度に出てきて、それを見てさらに容器を振ると、中のブロックがほとんど出てしまう。その後「あー」といって容器を右手で持ち上げ、母を見ながらそのほうにさし出す。母は「ありがとう」と容器をつかむがAは離さずそれを自分の前に戻して両手で支えて「あー」といいながら覗き込む。母も真似るように「あー」という。その間、A児はずっと右手には小さなブロックを持ったまま容器をつかんでいたが、容器を覗き込んでそのブロックを中に入れ（手を放す）、そしてまたすぐそれを容器から取り出して母親のほうを見ながら「あー」といって差し出す。母親も「あー」という。

（メタ観察）A児は二つのモノに同時に注意をむけるようになっていく。また母親のほうに自分から声とともにおもちゃを示して注意を共有しようとした。ここではA児主導による三項的相互作用が見られた。また母親は子どもの声の模倣という支持的行動を示した。

(5) エピソードから見た共同注意の発達的变化

各月齢のエピソード記述におけるメタ観察を整理し、共同注意の発達的变化について考察する。

6カ月齢では、3つのエピソード（エピソード1～3）とも、初めは二項的な遊びをしていた乳児に対して母親が自分の方に乳児の注意を向けさせる形で、支持的共同注意現象が認められた。しかし短時間しか続かなかった。その注意の対象は、乳児の気に入ったモノ、歌、指遊び、などである。このよう母親の注意喚起行動を矢藤（2000）は「転換」と定義し、20～22カ月の乳児においてその後の注意の共有的行為はあまり持続しないという結果を得ている。本事例でも「転換」後の注意共有の持続時間は短い、1歳前の乳児にも「転換」によって共同注意を誘導することが示されたといえよう。

7カ月齢では、3つのエピソード（エピソード4～6）のうち、エピソード4と5はA児の二項的な遊びに対して母親が呼応して共同注意現象が認められ、その後の母親の支持や強化によって三項的な相互作用が持続している。これを「応答」という注意喚起行動といえることができる（矢藤、前出）。エピソード6は、母親が自分の遊びに乳児を誘導する「転換」によって共同注意状況が生まれた。そして先の6カ月齢のエピソードより長く、共同注意状態が持続している。

8カ月齢のエピソード7では、平行遊びのように母子共に互いに積極的には関わらないが、乳児は母親の発声に応じて自分も声を出し、場を共有しているように感じられる。場の共有は岡本（1986）によれば三項的なコミュニケーション基礎であるが、共同注意には至っていない。エピソード8では、母親の遊びに誘導される「転換」によって共同注意がしばらく続いた。また、エピソード9では、乳児の身体活動（拍手、上半身を揺らす）に母親が応答することでテーマの共有という共同注意的な現象が見られた。

9カ月齢のエピソード10では、母親がA児のしているモノを操作して見せて、A児がそれを自発的に手を伸ばしてつかんで同じ操作をしながら母親を見る、という遅延模倣のような現象が見られた。エピソード11では、A児の自発的な操作に母親が応答する共同注意現象が見られた。エピソード12では、母親はA児の行為に意味づけして応答した。またおもちゃ操作を誘導し、「転換」によって支持的な共同注意現象が出現した。このとき、魔法瓶の音も乳児の注意喚起に一定の役割を果たしていると思われる。

10カ月齢では、エピソードの13、14において、母親へのモノの提示や社会的参照という現象が見られた。ここでは発声と共に自発的にモノを操作するA児に対して、母親が応答するかたちで共同注意が持続した。また、発声をともなう“モノのやりもらい”という相互作用も見られた。エピソード15では、A児はモノ操作の途中で発声と共に母にモノを提示した。母親は、子どもの声を模倣しており、これは共同注意を持続させる効果があったと思われる。

以上をまとめると、6カ月齢では母親からの注意喚起によって三項的相互作用への移行が見られるが、7カ月以降は、乳児自身の遊びに母親が応答する形の多くなってくる。とくに、9カ月以降は、共同注意場面において乳児からのほたらきかけ、すなわち母親へのモノの提示や社会的参照、さらにはモノの“やりもらい”などの多様な社会的スキルが出現している。

ここまで述べてきた共同注意の現象は、数10秒程度のかかなり短時間であり、母親の有効な支持や注意喚起行動がなければ続かないものである。その意味で、この時期の共同注意は萌芽的で支持的共同注意（大藪、2004a）現象ではあるが、母親の注意方略の違い（転換と応答）による乳児の反応の違いが、1歳前にも出現することが確認された。またその後どのように変化するのか、今後も資料を蓄積する必要がある。

全体的討論

本稿では、一乳児を対象とした生後6カ月後半から10カ月までの日常的な母子相互作用の観察を通して、二項から三項的な関係がどのような要因のもとに生まれるかを量的質的に検討した。

その結果、まず相互作用における注視対象の量的変化の傾向をみると、乳児は全体としてはモノや周りを注視している場合が多いが、母親を注視する傾向は7カ月から10カ月半にかけて徐々に増える傾向にあった。つまり、乳児の注意能力は徐々に自分の操作するモノだけではなく、他者との関係性へと開かれつつあることを示している。一方母親は第一に子どもを見ており、このような母親の見守る姿勢が、エピソード記述に示唆されたようにタイミングよく子どもに関わることでできる要因と考えられる。発声と身体活動の主な量的変化をみると、乳児の発声は全体として増加傾向にあり、母親の注意喚起的発声は減少している。このことは乳児は月齢とともに母親に何らかのサインを送る傾向が増し、母親は逆に注意を喚起することが少なくとも相互作用が継続していったということではないか。また乳児の自発的なモノ操作も9カ月半、10カ月半のほうがそれ以前より多くなっており、逆に母親の注意喚起

的なモノ操作は減っている。このような量的変化には統計的な意味はないものの、エピソード記述の結果と比較する材料となろう。

実際、エピソード記述におけるメタ観察の発達の变化をみると6カ月齢では母親からの注意喚起による三項的相互作用への移行が見られるが、7カ月以降は、乳児自身の遊びに母親が応答する形が多くなってくる。また、9カ月以降は、乳児は共同注意場面において多様な社会的スキル（モノの提示や社会的参照など）を示しており、上記の注視や身体活動の量的変化と対応しており、質的な記述データも意義をもつということができよう。このような現象は、本事例の乳児も、Tomasello（1995）の指摘するような「他者への意図性の認識」がやはり9カ月以降に顕著になることを示唆するものである。

今後の課題

本事例では10カ月半までの観察データを分析して共同注意の出現にかかわる要因に注目したが、共同注意の持続時間は1歳前後から1歳半にかけて長くなるといわれている。本事例研究の継続により、意図的共同注意のその後の発達についてさらに検討する必要がある。また、本事例研究の結果の一般性を確認するためにも、他の事例との比較検証を進めていきたい。

謝辞

Aさん母子には研究の主旨を理解いただき、5カ月間にわたる5回の自宅訪問とビデオ撮影に快くご協力いただきました。記して深く感謝いたします。

文献

- Bruner, J. S. 1983/1988 *Child's Talk.: Learning to use language*. Oxford University Press. (寺田晃ほか訳 乳児の話しことば——コミュニケーションの学習——新曜社)
- Butterworth, G. E. 1995 *Origin of mind in perception and action*. C. Moore & P. J. Dunham (Eds.) *Joint Attention: Its Origin and role in development*. (pp.

- 29-40) New Jersey; LEA.
- Dromi, E. 1987 Early Lexical Development. Cambridge University Press.
- 遠藤利彦 2005 総説:視線理解を通してみる心の源流
遠藤利彦(編)読む目・読まれる目視線理解と進化の
発達心理学 1章 pp. 11-68
- 鯨岡峻 2005 エピソード記述入門 実践と質的研究のた
めに 東京大学出版会
- Landry, S. H., & Chapieski, M. L. 1989 Joint attention and
infant toy exploration: Effects of Down syndrome
and prematurity. *Child Development*, 60, 103-118.
- 則松宏子 2004 共同注意と文化的文脈 大藪泰ほか(編)
共同注意の発達と臨床 川島書店 第12章 pp.
299-331
- 岡本夏木 1986 子どもとことば 岩波書店
- 大藪泰 2004a 共同注意の種類と発達 大藪泰ほか(編)
共同注意の発達と臨床 川島書店 第1章 pp. 1-31
- 大藪泰 2004b 共同注意 新生児から2歳6か月までの
発達過程 川島書店
- Reed, E. S. 1996/2000 Encountering the world: Toward
an ecological psychology. Oxford University Press.
(細田直哉訳 アフォーダンスの心理学 新曜社)
- Runyan, W. M. 1982 Life Histories and Psychobiography.
New York: Oxford University
- Tomasello, M. 1995 Joint Attention as Social Cognition. In
C. Moore & P. J. Dunham (Eds.) Joint Attention: Its
Origin and role in development. (pp. 103-130) New
Jersey; LEA.
- Tomasello, M. 1999/2006 The Cultural Origins of human
cognition. Cambridge: Harvard University Press. (大
堀壽夫ほか訳 心とことばの起源を探る けい草書
房)
- 塚田みちる 2001 養育者との相互交渉に見られる乳児の
応答性の発達的变化:二項から三項への移行プロセス
に着目して 発達心理学研究 12, 1, pp. 1-11.
- Willig, C 2001/2003 Introducing Qualitative Research in
Psychology (上淵寿ほか訳) 心理学のための質的研究
法入門 培風館
- 矢藤優子 2000 子どもの注意を共有するための母親の注
意喚起行動 発達心理学研究, 11, 3, pp. 153-162
- 矢藤優子 2007 乳児と母親のおもちゃ遊び場面における
注意の共有と母親の発話 発達心理学研究, 18, 1,
pp. 55-66
- 吉田直子 2005 幼児の第二言語使用を促す社会的相互作
用 言語学会第7回国際大会発表論文集 p. 175
- 吉田直子 2007 共同注意場面における母子相互作用の時
系列的変容について—発話量と発話内容分析からの仮
説生成の試み—中部大学現代教育学研究所紀要 1,
pp. 13-24.

受付日 2008年9月30日

受理日 2008年11月4日

Abstract

The present study examined what factors cause the transition from dyadic to triadic interactions between a mother and an infant, from six to ten months old. The main approach for this study was episodic analysis. Development of joint attention observed in play and behavioral chains between the mother and the infant were especially analyzed.

As a result of analyzing the amount of the infant's visual behavior and body activity, the infant tended to interact positively with the mother accordingly by age each month. In contrast, the alerting of the infant by the mother became gradually less.

As a result of episodic analysis, the transition from dyadic to triadic interactions alerted by the mother was observed at six months old. After seventh months, the mother tended to respond to the play of the infant. Additionally, after nine months, the infant started revealing many kinds of social skills which suggest that joint attention was formed between the mother and the infant.

In conclusion, it has been shown that a mother's approach to the infant might play an important role in joint attention and its development.